
また有明の空を

風色

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

また有明の空を

【Nコード】

N3429D

【作者名】

風色

【あらすじ】

イムノア王国の第三王女であるスイは、気ままな日々を過ごしていたが、緊張状態にある隣国から王子を迎えることに。幼い二人は次第に心を通わせていくが、国の思惑はそれとは別の道を歩み始めていた……。

OPENING

走っていた。

地面を蹴飛ばし、まるで飛ぶように。

空が流れていく。

笑った。

笑って笑って、笑いながらも足は止まらず、そのまま駆けて行く。

ぐんぐんスピードを上げて地面を駆け抜けて行く。

眼下が開けた。崖だ。数メートル下に、草場が広がっているのが見えた。

空中に浮かぶ、その一瞬。

明日の結婚相手の城が、ほんの一瞬だけ、ちらりと視界に入った。

「もう!」

腰に手を当てて、いかにも怒っているという意思表示をしているのはエイラだ。私専用のお付女官である。

歳は二十も半ばだろうか。その割には若々しい外見をしている。

「エイラ、今日もお肌の艶がいいね」

「そんな口説き文句を言っただって騙されませんからね!」

はあ、と聞こえよがしのため息を吐くと、エイラは汚れた私の口を綺麗に畳んだ。

それを椅子に腰掛けながら足をぶらぶらとさせ、見るともなしに細々とよく働くエイラの後姿を眺めていると、妙な沈黙が流れた。私が予想している質問が、エイラの口に上ろうとしない。

気を遣ってくれているのだろう、今日はまめまめしく働くエイラの背中が、なにかを呑み込んでいるように見えた。

私も黙って、いつもどおりの自室を眺め渡した。

「スイさま」

「うん？」

「明日は怪我などなさいませぬよう」

「うん。一応気をつける」

部屋の中に備え付けられた頑丈そうな暖炉の中から、猛々しく火の爆ぜる音が鼓膜を震わした。

明日の支度も終わったのか、エイラはエプロンを外して外着に着替えている。

窓の外に目をやると、彼方は群青に染まり、そろそろ夜の気配が近くなってきたている気配を漂わせている。

私は空が好きだ。朝も、昼も、夜も。絶えず移り変わる流転の空球は、この世で史上の芸術だと思う。

以前、そんなことを兄と姉に言ったら笑われたのだが。

それでも、本当に。美しいと、思う。

「見て、エイラ。もう夜になるよ」

「ああ、本当ですね」

指で窓を指し示すと、エイラはぎこちない笑みを浮かべた。その、いつもは澁刺とした笑顔がそんな風にぎこちなくなる原因を作っているのは私なので、かける言葉が見つからず、黙って俯いた。

「スイさま」

ふわりと、少女のような細腕ではなく、働く女のたくましい両の腕が私を包み込んだ。

あたたかくて、やさしくて、すべてをゆるしてくれるようで。

まるで奇跡みたいな温もりを持つこの腕に抱かれて、子供はたくさ

んのことを学んでゆくのだろう。

「私は何があってもスイさまの味方ですし、もしもスイ様に何かあったのなら、必ず助けます」

「うん。そうだね。ありがとうエイラ」

抱きしめ返し、目を閉じる。

瞼の裏に、群青の夜空に瞬く星々が、見えた気がした。

OPENING (後書き)

のんびりファンタジーですので、ゆるりとお楽しみください。

OPENING 2

王子、と呼ばれる身分は高貴なものだ。

もしかしたら、守るべきは俺自身じゃなく、『王子』であることを強いられた自分ではないかと思う。

そんなのは屁理屈だと、自分でも思っではいる。

俺は俺であって、『王子』ではない。

けれど、本当の俺は果たしてどこにいるのだろう。

『王子』であることを放棄したあとには、いったいなにが残るのだろう。

空っぽで、薄っぺらで、虚無よりも孤独な闇に『俺』が一人、ぽつりと残る。

両手で顔を覆う。

暗闇が俺を包む。

闇がその手を伸ばす。

洩れゆくのは、涙ではなく、空の心。

そうして俺は、空漠のなかに溶けてゆく。

* * *

長い廊下を歩いていると、前方の暗闇から足音が聞こえてきた。

そこで立ち止まり、じつと前を見つめる。

かつこつ、まだ相手は暗闇の中。

かつこつ、目に力を入れても、見えない。

かつこつ、足先が視界に入る。その、よく見覚えのある靴の持ち主を、俺はよく知っている。

絶望に満ちた顔を上げ、その人を迎え入れる。

暗闇の中、威厳に満ちた顔と、高い背丈はただでさえあり過ぎるほどの威圧感を相乗させている。

顔を下げ、礼の姿勢をとると、上から声が降ってきた。

「アヤト。何故ここに居る？」

「申し訳ありません。マリス賢者に書物を届けに伺った折、少々散策をしておりました」

沈黙。きつと相手は、こんな俺の嘘などお見通しだ。

けれどここで怯みたくはない。

顔を上げ、きつと目に力を込めて、父を見る。

我が国王であり、我が父、ツグヤ。

今は冷酷な表情を目に浮かべて、俺をじつと見下ろしている。

その瞳の中にあるものは、虚無。あるいは、空。

要は、なにもない。

あるのはただ、残酷な欲望だけ。

震え出しそうになる体を押し留め、気付かれぬよう、マントの下で腕を強く握る。

痛みが自制心を与える。ほっと息を吐いた。

「……部屋に戻れ。婚儀は明朝だぞ」
「はい」

もう一度深く頭を垂れ、父の足音が遠ざかるまでその姿勢でいる。

俺はいつも、思う。

あの人と言葉を交わした後、いつも思う。

世界は空漠なのだ。

ただ欲望だけに満ち溢れた世界でしかない、このうえもなく醜いものである。

……虚ろな目が、窓に映る。

そこにいるのは、誰なのだろう。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3429d/>

また有明の空を

2011年1月12日03時03分発行